

サブマシンガンの在り方を決定づけた傑作
MASCHINEN
PISTOLE 40
MP40

Report by Ken Nozawa 図版解説／鈴木健太郎



004 第69回 サイゴン物語 Saigon Memories
MACVがいたベトナム戦争「入口から出口まで」[18]

008 ベトナムを遠く離れて——。
M21スナイパーライフルWith PVS2 文／小倉 徹

042 知られざる プロフェッショナルたち
ベトナムのオーストラリア陸軍訓練チーム Part 2

051 The Equipments of the U.S. Force
[現用米軍装備カタログ]
2000年 米国海兵隊 FSBE(The Full Spectrum Battle Equipment)装備特集 PART1 解説／松原 隆

062 ウェスタンアームズ新製品リポート
Report by SHOTGUN MARCY
●プロキャリア・カスタムRL
パッカーウッド・グリップ・バージョン

066 タナカ・ワークス新製品リポート
Report by SHOTGUN MARCY
●S&W M27 “ザ.357マグナム” 3-1/2インチ HW
●S&W M360Jサクラ 海上保安庁モデルHW

070 トイガンニュース
ウェスタンアームズ
●コルトM1911A1 ミリタリー・モデル
タナカ・ワークス
●グロック17C 3rdジェネレーション・フレームHW
エボリューション2改／フジカンパニー・カスタム
●M20ピストルHW 共栄通商カスタム

072 Militaria Roundup!
アメリカ空海軍サバイバル装備

078 東京マルイ
第62回 静岡ホビーショー2024
東京マルイブース情報

084 サバゲ三等兵APS部
「シャッガン」っていったら
フツー腰だめでしょう? の巻

087 THE グリーンベレー
GREEN BERET
特殊部隊CIF中隊特集 Part7 解説／DJちゅう

092 DJちゅうの
GEARHEADS JUNCTION
ジャパン タクティカル ギア Vol.01
3メイド イシュー ギアコレクション

098 ニッポンのちからこぶ 写真・文／菊池雅之
19式装輪自走155mmりゅう弾砲

ボスゲリラ不屈のトイガン魂!
102 サバゲ・マスカラ・コントラ・マスカラ!

104 新製品情報 COMBAT mono

COMBAT FRONT LINE

107 今月の中田焦点!
Eagle Emblems 米4軍ベースボールキャップ

108 新作映画情報『ファラン』『関心領域』
『ティアーズ・オブ・ブラッド』

106 レアミリタリーテクノロジー

109 読者プレゼント & CIC

110 バックナンバー

111 次号予告&奥付



ミリタリースポッター

The Day When the Third Arm Becomes a Helping Hand

Infantrymen are tasked with shooting, moving, and communicating while wearing heavy gear. If a third arm were to emerge, it would indeed be a lifesaver for infantrymen. The Third Arm exoskeleton under development by the U.S. Army Research Laboratory is likely a type of augmentation suit. Here, a U.S. Army soldier is seen aiming with an 18-pound M249 while using the prototype of the third arm.

「第3の腕」がヘルピングハンドになる日

歩兵とは重い装備を身につけながら、撃って動いて連絡をとるのが仕事だ。そこに第3の腕が出現したら、それこそ歩兵にとっての助っ人になるはずだ。米陸軍研究所が開発中の外骨格の第3の腕は、機能拡張スーツの一種であろう。ここでは米陸軍兵士が、第3の腕のプロトタイプを使いながら、an 18-lbもの重量があるM249で狙いを付けている。

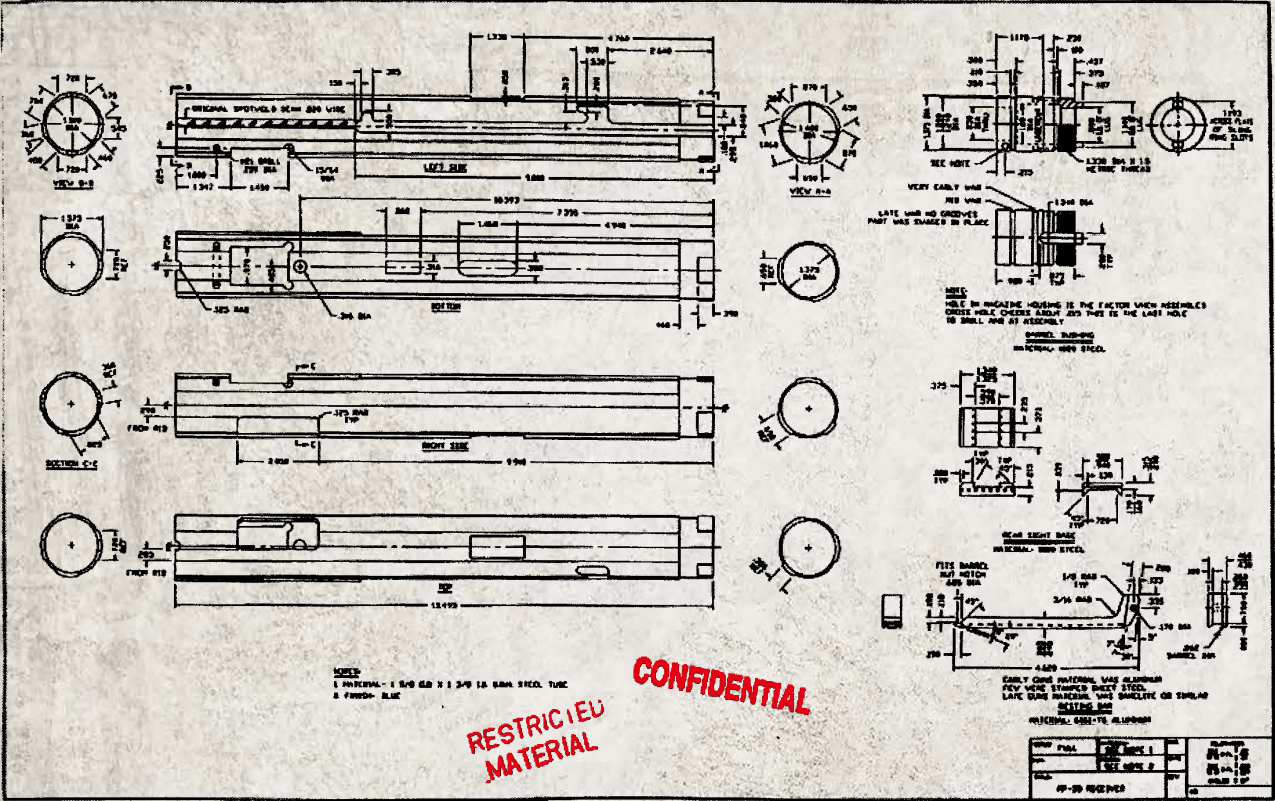
Photo/Conrad Johnson, US Army

サブマシンガンの在り方を決定づけた傑作
**MASCHINEN
PISTOLE 40
MP40**

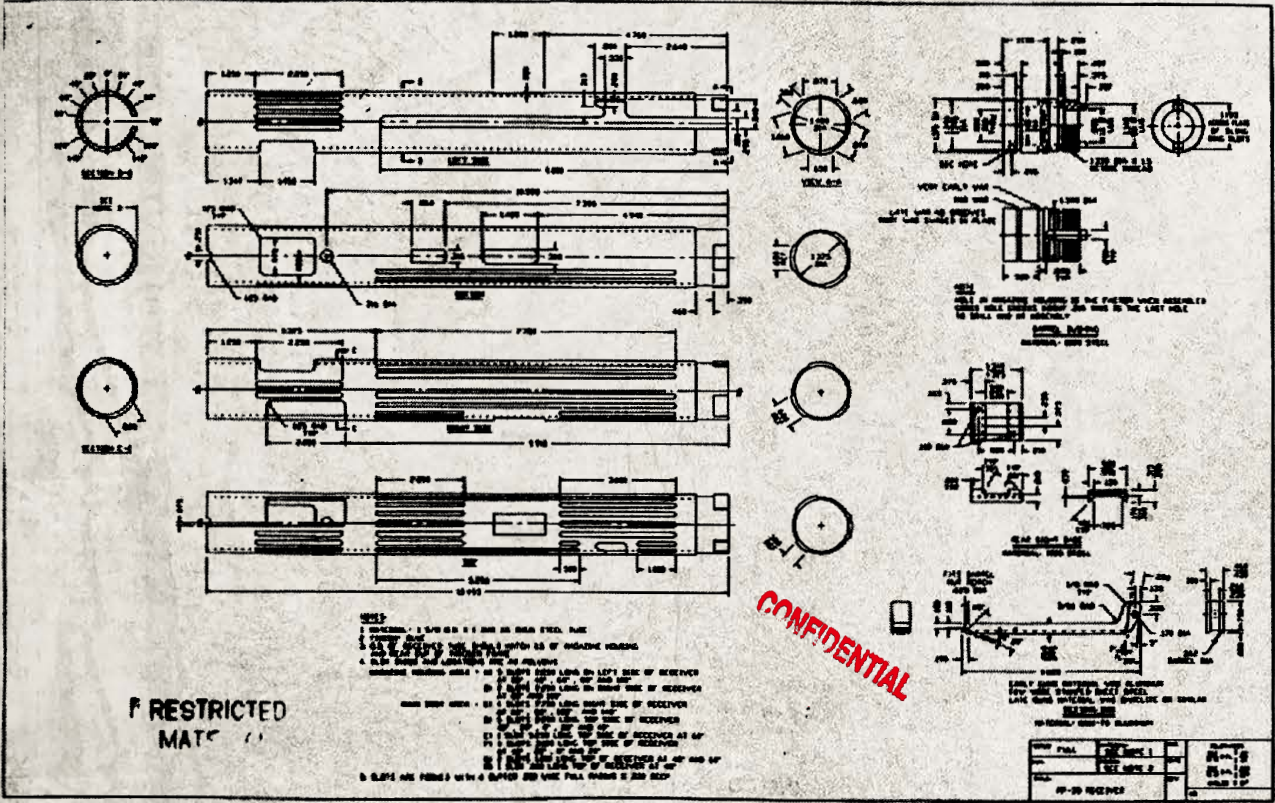
第一次世界大戦末期に鮮烈なデビューを果たしたマシンピストル。この革新的な新兵器は戦間期の20年で恐ろしいほどの進化を遂げ、第二次世界大戦では連合国に更なる衝撃を与えることになる。ドイツが満を持してこの戦争に投入したMP40は歩兵兵器にサブマシンガンという新たなカテゴリーを定着させた。

Report by KEN NOZAWA

図版解説 / 鈴木健太郎 photo / U.S ARMY, Bundesarchiv, Imperial War Museum, Springfield Armory National Historic Site, WPP Archive
Illustration / M.kelly



アッパーレシーバーの図面。上がMP40、下がMP38で、銅管を加工して作られたMP38のアッパーレシーバーは表面にフルート（溝）が彫られるなど非常に凝った作りとなっている。プレス加工の部品が盛り込まれたMP40は削り出しで作られた従来のサブマシンガンと同等の耐久性を持ちながら製造コストが低く、その製法はMG42やSTG44など他の歩兵兵器の製造にも取り入れられることになる。MP38とMP40は基本構造が同じで部品にある程度の互換性があったが、弾倉の一部はMP38にしか使えなかった。



かといえは、銃器用として人が扱い、人に対して攻撃するとき、最適解のサイズなのである。最も扱いやすく効果的なのだ。

一例として挙げると、ピストル用実包を小口径化すると、7.65x21mm弾では先述している通りパワー不足、主にストップパワー不足となる。別案として.30カービン弾のような仕様にするれば装弾数は9mmルガー弾よりも増やせ、かつ遠距離射撃にも有利だが、そもそも、ピストルで遠距離を狙撃できる腕前を一般の兵士には持たせられない。そして反動も大きくなり扱い難さが露呈してくる。

そこで逆に大口径化すると、.45ACP弾のように多弾数化は難しく、反動は大きく、製造コストも上がってしまう。

そもその「人」の能力や身体の高さが一定水準である限り、そこに求められるピストル用実包のベストと呼べるサイズも威力も決まってくるが、現状、そのベストと呼べるのが、9mmルガー弾なのだ。

元々はピストル用実包として開発された9mmルガー弾だが、後にサブマシンガン用実包としても活躍することとなり、ここでも9mmルガー弾は最適

解としての性能振りを発揮する。トンプソン・サブマシンガンやM3・サブマシンガンといった.45ACP弾を使用するモデルでの最大有効射程距離は150mほどで、9mmルガー弾を使用するMP40は200mとなっている。第一次世界大戦時、サブマシンガンは塹壕戦を有利に戦いたいという目標・目的から開発されており、その意味では、使用範囲は100m以内、50m以内、25m以内が多かったと思われる。それが第二次世界大戦では市街地戦なども増えたことで、200m以内での戦闘が中心となっていたが、9mmルガー弾はその射程距離をカバーし、有効に戦えた。そして有効射程距離200m以内という仕様は、アサルトライフルが主力火器となった現代において、見事なまでに住み分けもできている。

必要十分なパワーと射程距離を有した9mmルガー弾は、ピストル弾としてもサブマシンガン弾としても扱いやすく、無理と無駄のない実包なのである。

「サブマシンガン用実包として、無理と無駄のない実包」に関しては、次の、MP40の基本性能と目指した方向性、そして真価の紹介と合わせ、詳しく解説したい。

軍用サブマシンガンの原型MP40が目指した基本と方向

サブマシンガンの歴史と9mmルガー弾の有用性に関して長々と語ってしまったが、ここから主役であるMP40に関して詳しく紹介したい。MP40が歴史的な

傑作と評される理由は大きく2つある。

- プレス加工の多用と木製部品の廃止
- サブマシンガンとしての機能と性能

ここではひとつずつ説明していこう。

「プレス加工の多用」だが、先述しているようにMP40は前身となるMP38の簡易モデルとして、その製造方法にプレス加工を多用している。主要部品となるアッパーレシーバーおよびロアレシーバーをプレス加工で製造しているのだ。

プレス加工とは「モナカ方式」と呼ばれることもあるが、鉄板を押し曲げて左右の側を作り、そ

MASCHINENPISTOLE 40MP40

れを合わせて溶接することで完成させる工法になる。感じとして、タイ焼きの左右の側を作り、合わせるという作業に似ている。つまりは、最初に型を作っておき、その型の上に鉄板を乗せ、そのさらに上から圧をかけると鉄板は型の形になるという仕組みだ。

この加工法の長所は多い。生産性が高くコストは低く、複雑な形状の加工が可能で材料の無駄も少ないのだ。対して切削加工とは削り出し加工のことで、金属のカタマリを削り部品を作る工法になる。MP38のアッパーレシーバーは切削加工であったため生産性は高められず、コストも抑えられなかったことがMP40への仕様変更の要因であった。

また、MP38のロアレシーバーはアルミ合金の鋳造製造で、これは生産性は良いもののコストが高くなるという短所がある。金属に関して知識がないと何となく、硬くて重い鉄の方が、柔らかくて軽いアルミよりも高価に感じられるかもしれないが、実はアルミの価格は鉄の10倍以上もする。時期によっては20倍にもなる。アルミの原材料はボーキサイトと呼ばれる赤褐色の鉱石で地殻に広く存在するが、純度の高いボーキサイトは限られた地域でしか採掘できず、そもそもドイツにはボーキサイト鉱山がなかったためアルミは貴重資源だったのだ。そういった事情もありMP38のロアレシーバーもプレス加工へと仕様変更され、MP40は生産性を高めコストを下げたことになる。

軍用火器の性能を語るとき、威力や集弾性や操作性と同等か、時にはそれ以上に優先されるのが生産性とコストであることは過去に何度も触れたとおりである。ちなみに『Hitler's Germany: Weapons, Vehicles, and Tactics (Stephen Bull 著、2004年出版)』によると、1940年当時のMP40の販売価格は約75～90ドイツマルクだったと記載されている。1940年の75～90マルクが現在の日本円でどれほどの価値になるのかは難しいが、単純に為替レートから計算すると2万5000円ほどになる。実際にはそこに物価換算も入るため、おおよそではあるが7～8万円ほどになると思われる。

ここまできて、銃器に詳しいミリタリーファン、そしてガンファンの中には疑問が浮かんだ人もいるかと思う。疑問というのは「元々MP38のアッパーレシーバーは強度と耐久性を持たせるためにスチールからの切削加工で作られていたものをプレス加工に置き換えて問題はないのか？」という疑問である。ロアレシーバーはアルミ合金の鋳造製造であったものをプレス加工への変更であり、そこは何となく問題なさそうだが、アッパーレシーバーは問題ないのか？ という不安である。

プレス加工による部品作りだが、これは後にStG44の部品もプレス加工で作られていことから

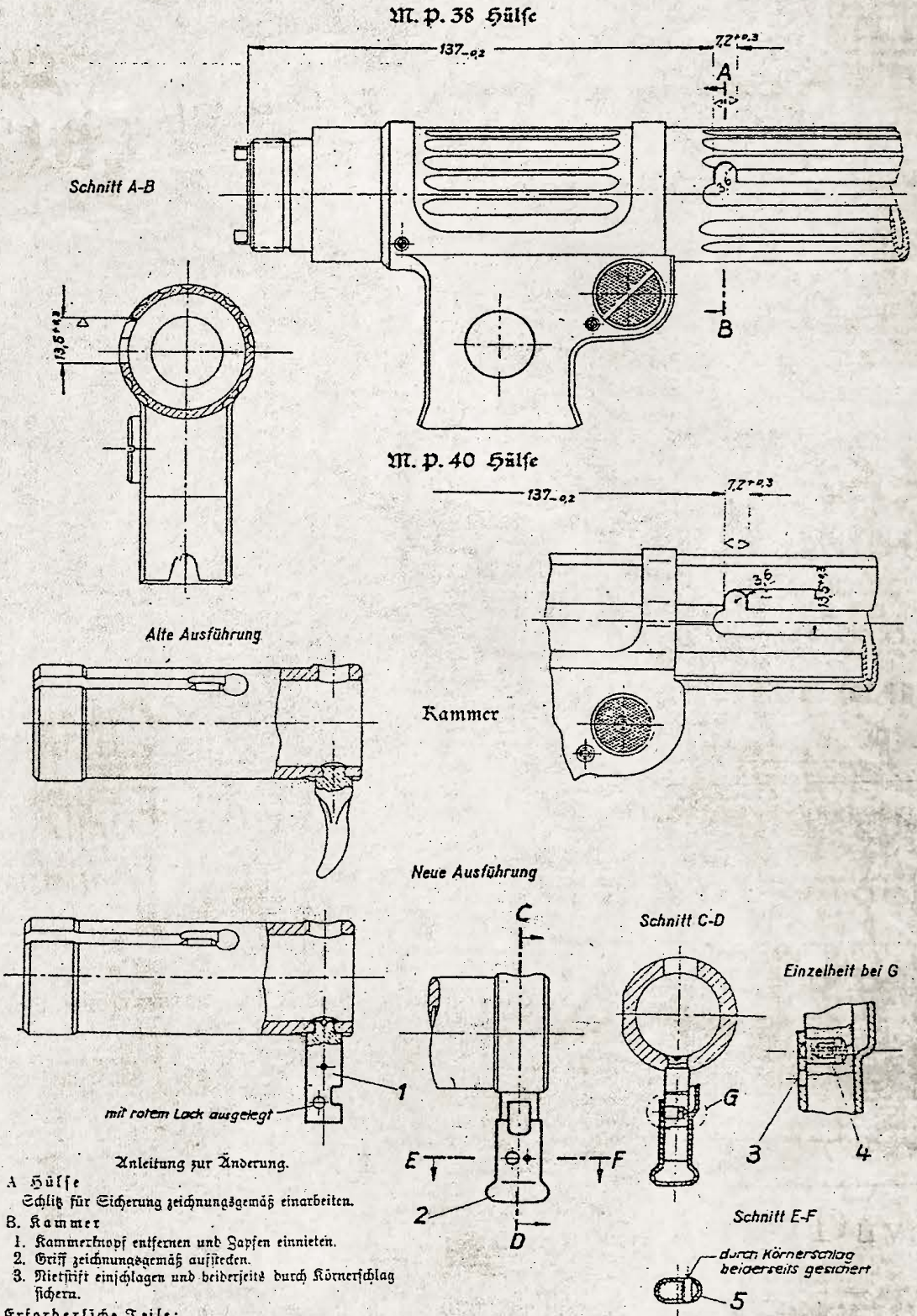
も分かりやすいが、強度、耐久性に関しての心配はない。特に9mmルガー弾はピストル用実包であり、サブマシンガンでの使用では一切問題はない。

次に「木製部品の廃止」だが、これもまた生産性の向上そして軽量化にも一役買っている。MP40最大の特徴（特長）ともいえる折りたたみ式のストックは、鋼板プレスとパイプで製造されており、一般的の木製ストックと比べると激しい扱いで変形することもあったとされるが、携行時は全長を縮められ、使用時にはしっかりと構えられ

る仕様のため、兵士たちの評価は高かった。特に戦車兵のように、狭い場所での携行や取り回しを余儀なくされる彼らには歓迎された。

また、当然ながら、木製部品と比べ鋼板プレスとパイプで製造されるストックは生産性が高いうえに品質は均一化し、経年劣化もない。木製の場合、水分を吸収しての変形や腐敗の心配があるが、その問題も解決しているのだ。そして木材の代わりに採用されたバークライト樹脂だが、それは単なるコストダウンに留まらず、大きな利点があった。

Änderungsanleitung. Anbringen der Kammersicherung (M.p. 38 u. M.p. 40)



Erforberliche Teile:
Nach Schüßlücke vom zuständigen Steigant anfordern.

新しく取り入れられた安全装置に関する図面。コッキングピースが通過する溝の前端部を広げて薬室閉鎖時にコッキングピースをボルト内部へ押し込み、衝撃でボルトが後退することで起きる暴発事故を防ぐというもの。この改修は1942年から43年にかけてMP38とMP40の双方で行われ、以降に製造されたMP40では標準装備となった。2つあるボルトは上がMP38、下がMP40で一番上のマガジンハウジングは何ヶ所ものフルートで分かる通りMP38のものである。

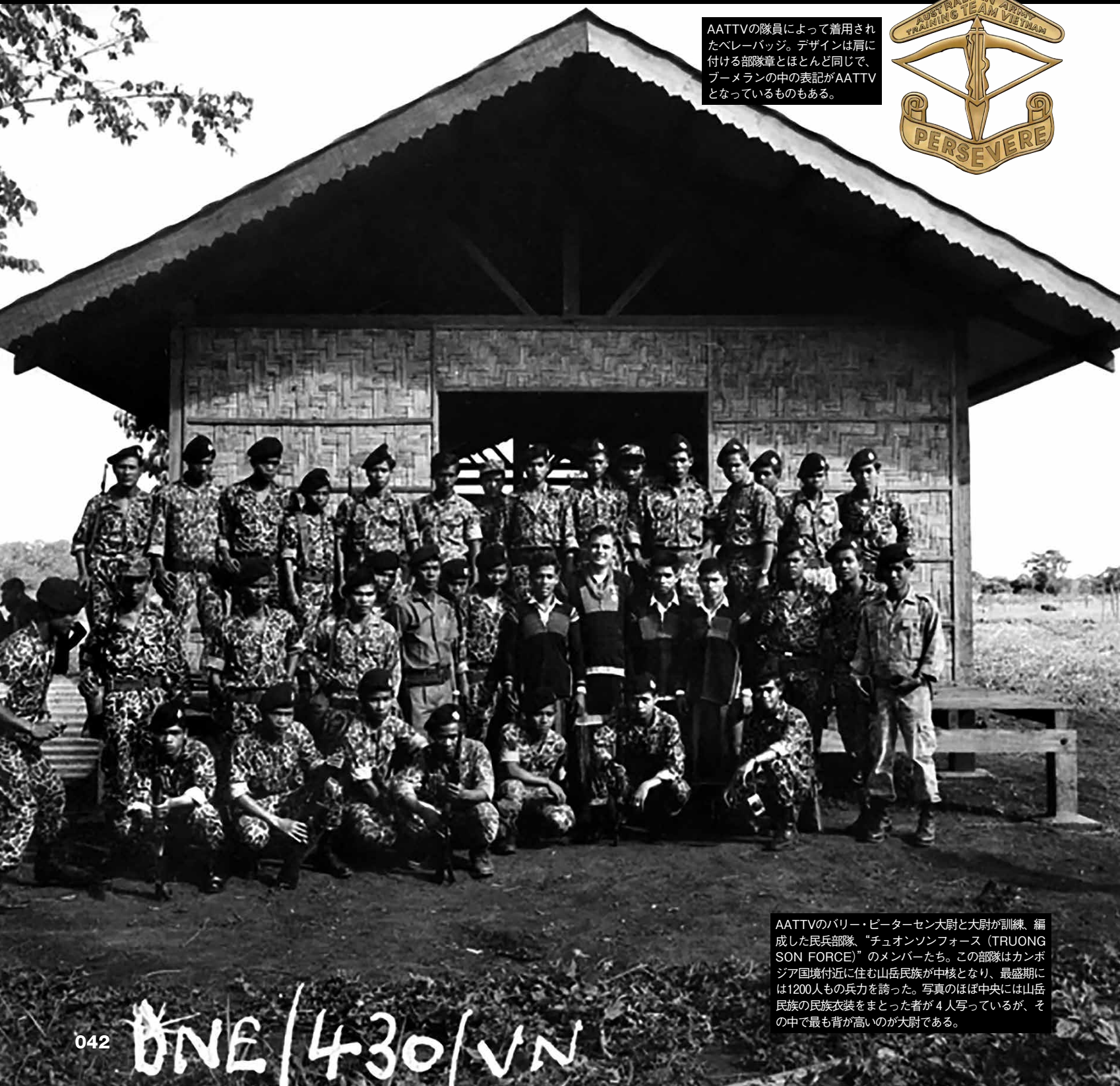
知られざる プロフェッショナルたち

ベトナムのオーストラリア陸軍訓練チーム Part 2

文／鈴木健太郎 写真／AUSTRALIAN WAR MEMORIAL, WPPアーカイブ

少人数ながら南ベトナム軍の訓練と支援などで目覚ましい働きを見せた在ベトナム オーストラリア陸軍訓練チーム (Australian Army Training Team Vietnam-略称AATTV)。彼らの姿を再び臨場感ある数々の写真で追ってみます。

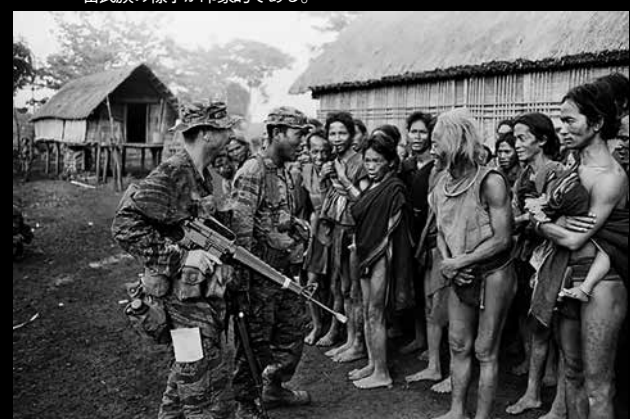
AATTVの隊員によって着用されたベレーバッジ。デザインは肩に付ける部隊章とほとんど同じで、ブーメランの中の表記がAATTVとなっているものもある。



AATTVのバリー・ピーターセン大尉と大尉が訓練、編成した民兵部隊、「チュオンソンフォース (TRUONG SON FORCE)」のメンバーたち。この部隊はカンボジア国境付近に住む山岳民族が中核となり、最盛期には1200人もの兵力を誇った。写真のほぼ中央には山岳民族の民族衣装をまとった者が4人写っているが、その中で最も背が高いのが大尉である。



(上) チュオンソンフォースの隊員と握手を交わすピーターセン大尉。大尉はマラヤ動乱で対ゲリラ戦に従事した経験を持ち、その経験をベトナムでも存分に活かした。(上右) 山岳民族の酋長と談笑するピーターセン大尉とジョン・ロイ准尉。チュオンソンフォースは虎の横顔を模したバッジを付けた緑色のベレーをトレードマークとしており、「TIGER MEN」という別名があった。(右) チュオンソンフォースによって用いられるGMC CCKWトラック。このトラックは荷台の正面に鉄板を張って防御力を高め、側面から乗降するようにした特別仕様で、待ち伏せを受けても容易に反撃することができた。(下) 捜索任務にあたるマイクフォース隊員を見守るAATTV隊員とアメリカ軍の軍事顧問。AATTV隊員はピストルベルトの代わりにBARベルトを着装しているが、この装備品はM16の弾倉を大量に携帯できるためマイクフォースやLRRP、SOGの隊員に人気があった。(下奥) 山岳民族の現地住民に聞き込みを行うマイクフォースの将校とAATTV隊員。迷彩服姿の二人を物珍しげに見つめる山岳民族の様子が印象的である。



(右) 各都市への距離を示した標識を見つめるAATTVの隊員たち。この写真は南ベトナム最北端の都市であったドンハで撮影されたと思われ、北ベトナムの首都ハノイへの距離表示が582kmと近くなっている。



THE EQUIPMENTS OF THE U.S. FORCE

第201回 [現用米軍装備カタログ]

2000年米国海兵隊FSBE装備特集 part 1

The Full Spectrum Battle Equipment

●解説／松原 隆 ●撮影／山崎 学 ●協力ショップ／LAZY CAT、トイソルジャー、TRI'S(旧特工工房) ●協力／木島秀邦

FSBEパッケージ爆誕!

1996年から海兵隊MEUやSRT(Special Reaction Team)に採用されていたポイント・ブランク社製AVS(Assault Vest System)防弾ベストが、ALICEシステムから新しくMOLLEシステムに変更されることで1999年頃に終了。それに合わせて海兵隊MEUにはFSBE(The Full Spectrum Battle Equipment)システム・キットが、2000年頃に納品を開始する。この中にはMICH TC2000ヘルメットや海兵隊オリジナルのロード・ベアリング・ベスト、各種CQB専用ポーチやMOLLE対応防弾ベスト等、当時の最新CQB装備が入ったFSBEキットが支給された。

ポイント・ブランク社制作のAAV(Amphibious Assault Vest:水陸両用強襲防弾ベスト)は海兵隊MEUのCQB接近戦闘専用防弾ベストだ。同社は一般海兵隊初採用のMOLLE対応インター・セプター防弾ベストを生産している(※AAVはインター・セプターの約30%の防弾面積をカットして軽量化している)。初期のAAVモデルはSPEAR BAS防弾ベストと同じ頃に制作された為、ベストが身体から分解するリリース機能がなかった。しかし1999年12月9日、太平洋上でVBSSトレーニング中だったヘリコプター「CH-46シーナイト」の海中墜落事故をきっかけに、AAV防弾ベストに海中で脱出する為の分解リリース機能を追加した。ベスト股間近くのナイロン製リング・レバーを下に引くと、ベスト4ヵ所を固定しているワイヤーが解除され、ベスト前後のパネルが分解する。現在では防弾ベストにリリース機能は当たり前だが、このAAVが最初の官給品だったのだ。今回は海中からの脱出装置として緊急浮力装置LPU-34/P RECONバージョンと最新のMEUライフ・ブライザー・浮力装置内蔵ジャケットの2通りのFSBEシステム・キットの装備も紹介する。



PRO CARRY CUSTOM RL Packerwood Grip Ver.



4インチ・サイズのスライドに合わせたショート・フレームに一体型アクセサリ・レールを備えたプロキャリー・カスタムRL。コンシールブルな戦闘用M1911モデルだ。



メタル・チャンバーカバーはシンプルな.45刻印。装填確認用のカット・アウトを備えたキンバー・タイプを組み合わせている。

トリガーは2カ所に長方形のカット・アウトを施したキンバー・デザインのマッチ・タイプ。トラベルアジャスト・スクリューも組み込まれている。

コンシールド性を追求した小型セミオートは、20世紀初頭から数多く製作されてきた。そのほとんどが、.22、.25、.32などの小口径モデル。9mmパラベラムや.45ACPなどの大口径ハイ・プレッシャー・カートリッジを使用するセミオートのサイズ・ダウンは、コントロール性と作動性

は強烈。充分なトレーニングを積まないと、適切に扱えるモデルではなかった。それでも、コマンダーよりもさらに短い全長、.45ACPカートリッジ1発分短いグリップ・フレームなど、想像を絶するコンパクトさと大口径のファイアー・パワーで一世を風靡した。

キンバーのロゴを刻んだバックカウウッド製の専用グリップを標準装備。接着剤やエポキシ系樹脂を染み込ませて加圧成形したバックカウウッドは耐久性に優れ、実銃の世界でも多く利用されている。

コンパクトなコンバット・カスタム、キンバー・タイプのプロキャリーに拡張性とさらに高度な戦闘力をプラスしたレールド・フレーム・カスタム

の点で限界があると考えられてきた。そんな常識を覆したのが、1970年代後半に登場した「デトニクス.45コンバット・マスター」。M1911の構造と外観を踏襲しながら、様々なアイデアを盛り込んでバレルを3.5インチ・サイズに切り詰め、バランスと信頼できる作動性を確保して.45ファンを熱狂させた。もちろん反動

デトニクスからおよそ10年遅れて、1980年代半ばにコルト社がM1911シリーズの最小モデル「オフィサーズACP」をリリース。デトニクスのアイデアをアレンジした内部構造ながら、外観は多くのガバメント・ファンがイメージするM1911そのままだった。このモデルが市場に供給されると、ややオリジナリティを利かせ



S&W M27 “The .357 Magnum” 3-1/2inch HW **MODEL GUN** *and* S&W M360J SAKURA 海上保安庁モデル HW **GAS GUN**



S&W M27 “ザ.357マグナム”
3-1/2インチ HW (モデルガン)
●全長:223mm
●重量:約750g (カートリッジ6発含む)
●装弾数:6発 ●価格:3万9,380円
●6月中旬発売予定

テーパード・バレルに近代的なセンスを感じさせるサイト・リブ、そして背の高いランプ・サイトを組み合わせたM27。往年のリボルバー・ファンにとって懐かしい「ハイウェイ・パトロールマン」の高級バージョンだ。

ハイウェイ・パトロールの制式採用 リボルバーとして多くのファンを 生み出したM28の高級バージョン、 レジスター・マグナムM27新登場!!

アメリカ各州の高速警察、ハイウェイ・パトロールを象徴するマグナム・リボルバーM28を発売したタナカ・ワークスが、そのベースになったリボルバー「S&W M27」をモデルガン・シリーズに追加する。M27と呼べるモデルガンは、1970年代半ばに生産された亜鉛合金製モデルのみ。およそ半世紀を経て登場するタナカのM27は、外観、サイズ、そしてメカニズムなど、全てにおいて大幅な進化を遂げている。往年のリボルバー・ファンの興奮が、頂点に達すること請け合いだ。

第一次世界大戦が終結すると、アメリカでは経済が急速に発展し、民衆の生活にも余裕が生まれた。国全体が豊かになっていくにつれて、裏社会にはいくつかのギャング組織が生まれ、禁酒法が施行された1920年以降は、各州でギャングと警察の熾烈な戦いが頻発する。強力な小火器を備えたギャングを相手にする警察関係や政府組織ではより強力なカートリッジが求められ、S&Wは.38/.44.

SWスペシャルを開発。45ハンド・エジェクター (M1917) の流れをくむ、Nフレームの「.38/.44.ヘビー・デューティ」を完成させた。1930年に登場したこのリボルバーを、さら

.44SWスペシャル用のシリンダーを.357マグナム用に転用してデザインされたタフなM27。各チャンバーを隔てる隔壁の厚さが、優れた耐久性を如実に物語る。



ブリッジからサイト・リブにかけて反射を防止するスクエア・タイプのチェッカー。Kサイトにも同様のチェッカーが刻まれている。



Militaria Roundup!

アメリカ空海軍サバイバル装備

戦闘、あるいは事故で乗機を失って脱出した航空兵が直面するのが「生存」という問題だ。そこで軍は各種航空用のサバイバル装備を開発支給している。今回はそれら装備の中から航空兵が身に着けて携行する各種アイテムを紹介しよう。

解説／菊月俊之 写真／青木健格

撮影協力／MASH ☎06-6567-3312 <http://www.mash-japan.co.jp>、中田商店 ☎03-3823-8577 <https://www.nakatashoten.com>

サバイバルと航空装備

現在では必ず航空機に搭載される各種サバイバル装備。飛行機が軍用として使用された当初、遭難した搭乗員が生存するための装備は考慮されておらず、パラシュートが唯一のものだった。その後ライフ・ヴェスト(救命胴衣)が装備に加わったが、サバイバル装備の開発が本格化するの第2次大戦中となった。ちなみに“サバイバル”という呼び名は戦後に一般化したようで、第2次大戦中のアメリカ陸軍航空隊では“エマージェンシー・サステイネンス(Emergency Sustenance/緊急生命維持)”の用語を使用している。

第2次大戦は世界規模の戦争で、航空機による長距離作戦が頻繁に実施される。その過程で不時着あるいは撃墜された飛行兵の生存を目的とする緊急装備の必要性が生じ、それに応じて開発された各種アイテムでサバイバル装備が構成されていく。航空機用のサバイバル装備は①航空兵が身につけて携行するもの、②航空機に搭載されるもの、③救難組織が使用するもの(空中投下式の救命ボートなど)の3つに大別される。



ライフ・ラフト(救命筏)
海上に不時着水した場合に使用されるサバイバル装備の代表格がライフ・ラフトで、航空機に搭載される。サイズは搭乗員の人数に応じて複数のサイズが作られており、写真は第2次大戦中に海軍単座戦闘機に搭載された1人用。ライフ・ラフトには多少の水と食料等のサバイバル装備が搭載されている。
(Photo:U.S. Navy)



C-1サバイバル・ヴェスト VEST, EMERGENCY SUSTENANCE TYPE C-1

第2次大戦中の1944年に陸軍航空隊が採用したC-1サバイバル・ヴェスト。全部で16個のポケットが設けられており、緊急用レーション、折り畳みナイフ、ファーストエイドキット、信号ミラー、照明弾等を携行した。制式名称は“エマージェンシー・サステイネンス・ヴェスト”で、現在のように“サバイバル”という単語は使われていない。(撮影協力：MASH/91-00-3292 US AAF WWII C-1サバイバルベスト/価格4万7000円)

サバイバル装備とレーション

人間の生存にとって水と食料は必要不可欠の存在で、航空用サバイバル装備にも含まれている。第2次大戦中の陸軍航空隊では飲料水の缶や野戦用のレーションが緊急用キットの内容物として使用されたほか、航空機に装備された緊急用キットにはチョコレートが入れた。また海軍では栄養価の高いクエン酸、脱脂クエン酸、麦芽ミルク、マルチビタミンの濃縮タブレット、チューインガム、防水袋とクリップを缶に入れたタブレット・レーションをライフ・ラフト(救命筏)の付属品として使用している。

アメリカ軍が本格的にサバイバル用レーションを開発するのは1961年からで、空軍はシリアル・バーとインスタント飲料から成る汎用サバイバル・レーションを採用。海軍はハード・キャンディとガムで構成されるサバイバル・フード・ポケットを採用している。

海軍サバイバル・フード・ポケット

海軍サバイバル・フード・ポケット(Food Packet Survival, Aircraft, Life Lalt)は海上に不時着し、救助を待つまでの間に食べることを想定したもの。内容物は市販のチャームズ・キャンディーと粒ガムで、1パック300カロリー。炭水化物100%のハード・キャンディーは即エネルギーとなるため、理想的サバイバル食とされる。



E-1ヴェストはサバイバル無線機の携行用装備で、両脇にポケットが付くシンプルなデザインが特徴。1958年契約分まで左胸に空軍のロゴがプリントされていたが、62年契約分ではロゴが省略された。MASHでは熱転写式『USAFロゴマーク』を同位置にプリントしたもの(商品番号00-10-7207 価格1万2980円)も販売している。(撮影協力：MASH/00-10-7200 USAF E-1 ラジオベスト/価格1万1880円)



無線機用ポケット

サイズは幅9、高さ16、奥行5.5cmで、フラップは3個のプレス・スタッド・ファスナーで閉じる。ポケット上部は革で補強されており、上面に無線機とバッテリーを繋ぐ電源ケーブル用の開口部が設けられている。右側にRT159A/URG-4ラジオ、左側にDTD3-67バッテリーを収納する。

ヴェスト装着状態

E-1ヴェストに収納した状態のAN/URC-4ラジオ。無線機とバッテリーを繋ぐCX-1093ケーブルは長さ2ft6in(76.2cm)5ft6in(167.6cm)の2種類が存在し、長さは使用する状況に応じて決定する。ヴェスト右胸に空軍のロゴが付いているのに注意。(U.S.A.F.)



エクステンション・ベルト

背中に縫い付けられた幅2.5cmのストラップは無線機収納用ポケットのループを通して正面に回し、ヴェスト正面で閉じる。これは重量が大きい無線機が動かないように、身体に押し付けて密着させるためのもの。ストラップには5個のプレス・スタッド。ファスナーが付けられている。



スライド・ファスナー

ヴェスト正面はスライド・ファスナーで閉じる。今回紹介のヴェストには黒染めされたコンマー製を使用。スライダーの引き手に布製のプル・タブが付くのは他の航空衣料と共通の特徴。



E-1ラジオ・ヴェスト VEST, RADIO CARRIER TYPE E-1

E-1ヴェストは不時着した航空兵と救援機が交信するためのAN/URC-4無線機を携行するヴェストで、1949年に採用。採用当初のアイテム名は“Vest, Radio Carrier(無線機携行ヴェスト)”で型式は付いておらず、“E-1”の型式が付くのは52年からとなっている。

E-1ヴェストはサバイバル用無線機を携行することに特化した装備で、素材には目の粗いナイロン生地を使用。採用当初は色がオリーブ・ドラブだったが、朝鮮戦争中の51年にエアフォース・ブルーに変更。57年にはセージ・グリーンとなった。ヴェストはフライト・スーツの上に着用し、その上からパラシュート・ハーネスを装着する。携行するAN/URC-4無線機は空海軍共通装備だが、E-1ヴェストは空軍のみが使用。1962年に生産が中止された。今回紹介するのは62年発注分のオリジナルだが、一般向けの複製品が数社から販売されている。

ラベル

ラベルは織りタイプで黒地に銀(グレー)文字だが、文字が金色(黄色)のものも存在。一番下の契約番号が“QM(Quartermaster/補給部)”で始まっているが、これは1962年発注分の特徴で、それ以前は“AF(Air Force/空軍)”で始まっている。またスペックNo.は採用当初は“3153”だったが、MIL(Military/軍)スペック導入により“MIL-V-5876”に変更された。E-1ヴェストのサイズはS、M、L、XLの4種類が存在。





第62回

静岡ホビーショー2024 東京マルイブース情報



Photo & Text by Takeo Ishii 東京マルイ ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp 静岡ホビーショー <https://www.hobby-shizuoka.com>

2024年5月8日～5月12日の5日間にわたって、今年もツインメッセ静岡にて「第62回 静岡ホビーショー2024」が開催された。昨年に引き続き8・9日の業者招待日、10日の小・中・高校生招待日、11・12日の一般公開日ともに「来場にはWEBサイトからの事前登録が必須」という条件下での開催だったが、そのWEB申請も早々に締め切られる大盛況！ 昨今何かと話題の「多様性の時代」を反映してか、ホビー業界に対するビジネスシーンからの期待、一般の方々が寄せる関心の高まりなどが、現場の熱気からも肌で感じられた。本誌読者が気になる東京マルイ・ブースには昨年に引き続き試射レンジが設置され、今年は純正Li-Poバッテリーを搭載しスムーズかつパワフルな連射を楽しむ「PATRIOT+PLUS」の体験射撃が催された他、今回のホビーショーで初披露となったエアリアルボルバー新製品「SAAキャバルリーカスタム」のシックでクラシカルな展示など、いつもとは一味違った「大人風味の落ち着いたムード」が心地良かった。

information



THE GREEN BERET SPECIAL FORCES CIF COMPANIES 特殊部隊CIF中隊特集パート7

vol.59

Part 7
文・イラスト/DJちゅう
写真/U.S.ARMY

こんなに長いシリーズ連載になる
とは思ってもいなかったCIF特集。
深掘りしてみれば皆様に紹介したい
内容が次から次へとあふれ出て、気
付けば今回で第7回目です。さて、前
号では設立当初のCIFの構成と運用、
JSOCとの連携とCIFの潤沢な資金
のお話、9.11以降におけるCIF運用の
方向転換などをご紹介しました。よ
うやく現用装備的なお話になってき

ましたが、今回は2010年代以降に動
きのあったアフリカ方面と伝統的な
任務のひとつであるPSDを装備解
説とあわせてご紹介します。さらに
アフリカ方面といえば、映画『13時
間』でも題材となったリビアで実際
に起きた米領事館襲撃事件にCIFも
関わっていた(?)という裏話なども
紹介。今月も盛りだくさんです。
解説にあたって補足なのですが、

CIFは現在に至るまで数度名称を変
更しているので解説する年代に合わ
せて名称を使い分けています。
・「CIF」設立～2015年頃まで
→「CRF」
・2015年頃～2021年頃まで→「HTD」
・2021年頃～2023年頃まで
→「CTAC」※現在
と、なりますので、分からなくな
ったらこちらをご確認くださいませ。

参考文献 jackmurphywrites.com 「SPECIAL FORCES TO DISBAND THE COMMANDERS-IN EXTREMIS-FORCE (CIF)」、
HIGHSIDE 「Revenge on the CIF - How "The Haters" Cut Special Forces' Last Link To JSOC」、SOF NEWS 「Operation
Gideon - Failed Attempt to Overthrow Venezuela Regime」、Służby Ochrony Państwa 「Zabezpieczenie wizyty Prezydenta
Stanów Zjednoczonych przez SOP」、QUARTZ 「Fog foiled Trump's surprise trip to the DMZ, where the South Korean
president was waiting」、PRENSA LIBRE 「Francotiradores y fuertes medidas de seguridad ante llegada de la vicepresidenta
de EE.UU., Kamala Harris」、NEWYORK TIMES 「U.S. military's Africa Command wasn't equipped to deal with Benghazi」、
AUDACY 「Ex-Green Berets tried to recruit this vet for a failed coup. Now he's speaking out」



DJちゅうの GEARHEADS JUNCTION

Japan Tactical Gear Vol.01

3 MADE ISSUE GEAR COLLECTION

#3MI #3MADEISSUE



GEARHEADS :[ギアヘッズ]
熱狂的な装備フリーク—
JUNCTION :[ジャンクション]
接合, 連接, 交差点または分岐点—

皆さん、どうもこんにちは！ DJちゅうです。いつもは本誌連載企画「月刊グリーンベレー」にて、グリーンベレーについてのアレコレを解説している生粋なグリーンベレーマニアな僕ですが、文筆業と並行して『3 MADE ISSUE/スリー メイド イシュー(以下、3MI)』という、メイドインジャパンなギアブランドを運営しています。あ、すでにご愛用頂いている皆さま、ありがとうございます。初めましての方はぜひ名前だけでも覚えてくださいね。

3MIアイテムはデザイン・制作・販売の全てを自分(つまりDJちゅう)で、手掛けておりまして、タクティカルギアからキャンプ系グッズ、普段使用のEDCアイテム、多種多様なパッチ、そしてたまにアパレルも展開しています。米軍特殊部隊&タクティカルギア好きが相まって、どことなく陸軍特殊部隊の系統を感じるアイテムが多く、作るギア達もミルスベック部材を余すことなく取り入れ、割とこだわりが強いブランドかなと思っております。基本的にはオンラインでの販売がメインなのですが、たまに各地のミリタリーイベントでも出店・販売していますので、お近くの方はぜひ遊びに来てください！

さて、今回の「ギアヘッズジャンクション」は、手前味噌ではありますが、私の手掛ける『3MI』の最新アイテムから人気アイテムの一部を皆様にご紹介させていただきます！



- ヘルメット：FTHS・Agiliteカバー
- プレートキャリア・ブラカード：VOLK TACTICAL GEAR/ SBPC・Rufus Core
- ウエア：CREY PRECISION/G3 Combat Shirts & Pants



NEW ITEM!



チャージ爆薬やチューブラナイロンを運ぶ専用設計。

"ARMINE" TUBE POUCH
アーミンチューブ ポーチ
予備 5,500円

細長いチューブ型のユーティリティポーチ。30フィート(約9m)もあるチューブラナイロンの運用や、長さの異なるスラップチャージに対応。バンジーコードの締め具合で2点保持にしたり、下側を閉じれば短いスラップチャージにもちょうどいいサイズになります。他にも衣類やエントリーツールなどの運搬にもおすすめです。上下どちらからでも取り出しが可能。各色展開予定。※画像は試作品のため若干デザインが異なる場合がございます。



上下のバンジーコードとコードロックの絞りで2点保持。



NEW ITEM!



NEWSKOOL BANDOLIER
ニュースクール バンドリア
予備 7,700円

予備マガジンを素早く携行するのに便利なバンドリア。最新のコーデュラ生地を使用し、旧来より存在する米軍のコットンバンドリアをリファイン。肩にかければそのままシューティングやサバゲーで使えるだけでなく、マガジンの運搬にもひと役買います。左右の小型ポケットにはピストルマガジンやライト、サイリウム、ペンなどの小物の収納にも便利です。基本的にはM4の30連マガジンに合わせ設計されていますが、サイズが合うマガジンなら工夫次第で運用可能です。極力シンプルに設計したミニマリストデザイン。各色展開予定。※画像は試作品のため若干デザインが異なる場合がございます。

米軍バンドリアを現代風にアップデート。

丸めるとマガジン1本分くらい
の大きさに。



30連マガジン3本、
ピストル2本(または止血帯など)
を収納可。



19式装輪自走 155mmりゅう弾砲

陸上自衛隊に新たに配備されている自走式特科火砲——。

それが日本中に広く配備されていた

155mmりゅう弾砲FH70の後継となる19式装輪自走155mmりゅう弾砲だ。

装輪式としたことで、高い機動力を誇る、島嶼防衛に期待される最新装備を詳解する！

陸上自衛隊において、前線で戦う第一線戦闘職種といわれるのが、普通科（歩兵）、特科（砲兵）、機甲科（戦車）だ。それぞれの頭文字をとり「普特機（ふとっき）」と呼ぶ。また、地雷原の処理や陣地構築など各種サポートを行なう施設科（工兵）を加え「普特機施（ふとっきし）」とすることもある。

特科部隊の主力火砲が155mmりゅう弾砲FH70であり、日本中の特科部隊に配備されている。例外なのが北海道を守る北部方面隊だ。こちらは海を隔ててロシアと国境を接するため、特別な装備体系となっている。というのも、ロシアは機甲科を中心とした戦闘大隊編成で戦う。そこで、北

部方面隊も機甲科が中心となる。そのため「普特機施」は、90式戦車や10式戦車と行動を共にできる機動力と堅牢性が求められる。そこで北部方面隊の特科部隊は、装甲車化した99式自走155mmりゅう弾砲が配備されている。

FH70はトラックで牽引して運ぶため、移動に時間がかかる。また、射撃陣地に展開後も、射撃ができる姿勢を取るまでに多くの人力が必要であり、特科隊員の熟練度、すなわち“職人技”に頼る所も多い。即応力、機動力が求められている現在の陸自の戦術にはマッチしなくなってきた。

特に本州や九州では、16式機動戦

闘車に代表されるように、装輪式の車輛が求められている。いざという時は、高速道路や一般道を時速100km近くで爆走し、必要とされる場所へと向かう必要があるからだ。

そうすると、FH70の後継は装輪化した自走砲である必要がある。こうして誕生したのが19式装輪自走155mmりゅう弾砲だ。装輪式の野砲は世界にも多く存在し「Wheeled Self-propelled Howitzer」と呼ばれる。陸自ではこの頭文字を入れ替えて“WHSP”と呼ぶ。

装輪式車両の荷台に155mmりゅう弾砲がむき出しで積載されている独特のフォルムが特徴的だ。土台となる車輛は、MAN社（独）製の8輪式

の大型トラック「HX44M」だ。試作車は、車両前面に「MAN」と書かれたプレートが掲げられていた。量産型からは日本製鋼所（Japan Steel Works）がライセンス生産しており、以降は「MAN」ではなく「JSW」と掲げられている。

各装置のオート化により省人力化を成し遂げた。FH70は8名で運用する必要があったが、こちらは5名で移動から射撃までが可能だ。火力戦闘指揮統制システム「FCCS」とネットワーク化されており、数値化された座標をタッチパネル式のモニターで入力し、射撃を行なう。砲弾は自動装填されるが、装薬（火薬）は人力での装填が必要な半自動式となっ

矢臼別演習場（北海道）で行なわれた西部方面特科連隊による19WHSPの実弾射撃訓練の様子。4つの大隊が内包されており、その中の第1大隊が19WHSPの運用部隊となっている。